



1987年(昭和62年)  
10月号(No. 508)

社団法人 日本山岳会  
The Japanese Alpine Club  
定価一部 150 円

## 目次

- 現代登山の源流 田口二郎……………(1)  
海外の山……………(2)  
「あと505メートル」  
「パキスタンのトレッキング規則」  
東西南北……………(5)  
「有志閑談会」「白峰北岳」「白馬登山」  
「西藏行」「おわび」「会員通信」  
図書紹介……………(6)  
「報告書4冊」「屋久杉が消えた谷」  
「山頂へのみち」「尾瀬は病んでいる」  
「画文集 山麓紀行」「火山の一生」  
「守れ権現」  
トレッキング55コース……………(8), (9)  
報告……………(8)  
科学研究委員会、医療委員会  
会務報告・ルーム日誌・会員異動……………(10)  
新入会員及会員住所等変更……………(10)  
三国友好合同登山  
会員募金応募者ご芳名……………(10)  
お知らせ……………(11)  
熊本支部、図書委員会、海外委・  
指導委、総務・青懇・婦人懇、  
総務委、科学研究委

▶日本山岳会事務取扱時間  
月、火、木、土曜 10時～20時  
水、金曜 13時～20時  
日曜・祭日は休み  
▶図書室開室時間  
日曜・祭日・月曜を除く毎日  
13時～20時

お知らせ電話  
234六六五九

## 現代登山の源流

—ボニンントンとメスナー—

田口二郎

会誌のコラム「海外の山」は、テーマを立て登山の近況を紹介してくれるので、ものごさな年寄りにはたいへん有難い。記事をやむに現代の、とくに極限登山の多彩さに驚かされる。この登山のスタイルの多様化の源流は、何処に発するのであろうか。「多くの人がその原点としてボニンントンとメスナーを挙げている。これは歴史の検証を待つべき事柄だが、昨年、私は、同じ時期にたまたまボニンントンの『冒険の追求』という本と、『岩と雪』が連載した「ヒマラヤン・サミット」(117・118号)を読んで、その感を深くした。後者は、欧州のトップ・クライマー七人が南チロルのメスナーの居城で縦横に喋った座談会の記録である。(以下サミットと略す)

この二つを読んで、私は現代のヒマラヤ登山を過るとボニンントンとメスナーに突き当たった。現代のヒマラヤ登山は、この二つの流れが合流している様相を示しているようである。以下の小文は読者にとっては既に「ご存知のことしか書けないが、筆者のお習いとしてご笑読頂ければ幸いである。ボニンントンの登山スタイル

まずボニンントン。年長で現役を卒業したとみられたのか、サミットには招かれていない。サミットでマスコミとの関係を探り上げた箇所、彼の英国での後金と目されるダグ・スコットが、英国の登山史でマスコミに身売りしたのはボニンントンだけだ、と批判している。マスコミの人氣を一人占めしたのが、若い世代の不滿の一因らしい。これに対してメスナーが、君達は彼の悪口を言うが、過去二十年間、英国の若手が次々とヒマラヤに登れたのは、ボニンントンのお陰じゃないかと反論している。ボニンントンは、プロのフリーランスライターでもあったので、マスコミに対しては素人ではない。彼の前掲の本は、四五年以降に行なわれた、山・極地・砂漠・海・河・空・洞窟・宇宙の分野の冒険を二十一選び、彼自身がその冒険物語を再構成したものであり、人間ドラマ・文化論ともなっている。訳本が出る予定だが、その中で彼の登山を記した唯一の章「アンナプルナ南壁」を読むと、無名の隊の資金作りの苦労と、成功した時、本をアメリカで広く売ったため、未知の米人登山家を一人隊員として加えるくだりがある。こんな世故にたけた配慮は、それまで

の英国登山界の伝統にはなかったと思う。彼はもう久しく英国登山界でハントを継ぐ代表的登山家として、ひろい人氣を博している人物だが、この一事からみても、やはり戦後の大衆登山の申し子といえる。現代のヒマラヤ登山にはかなり冒険主義的なものが見受けられるが、ボニンントンも冒険一般に広い興味をもつ現代人であり、冒険の動因の一つに競争心を摘出した戦後派ではある。しかしその体質はあくまでイギリス人である。他のヨーロッパ諸国の連中と比べると危なげのない正統派でそのバランス感覚はイギリス人以外の何ものでもない。彼の初期の輝かしい業績は、みな酸素と包囲法による重装備主義だ(因みに、彼はメスナーより八歳年上だが、同じく、戦後ヒマラヤの第二世代に属する人物ともいえる。すなわち黄金時代でも初期のフランス隊のアンナプ

ルナ、オーストリア人ヘルマン・ブルーのナンガ・パルバット、ティツヒのチョー・オユーなど彼らの登山は無酸素、ソロ、速攻の面をもったのを、想起していただけばよいだろう。また、メスナーを含め戦前からドイツ系登山家にみる「死の淵に触れてみたい」暗い衝動は、ボニンントンにはおよそ無縁のものだ。

ラヤでは黄金時代に直結して出現した。それはアルプスの高度の登攀技術がそのまま移転された結果である、とボニントンに誇らし気に分析している。

それでは彼を創始者にしたアルプス流のヒマラヤ難壁登攀は、今日どこまで達成されたのだろうか。興味のある点だ。先述のサミットではこれに触れて、技術的難度の達成度については、第一次大戦前のアルプスの段階、いうなればまだ雪(と氷)を登っている段階であり、むずかしい岩登りはこれからの課題であると指摘されている。やはり流石にヒマラヤ巨峰のガードは固いというを思い知らされる。

ボニントンの取り組み方はあくまでアルプス登山の延長線上にある、自然が作り出している地形的困難に素直に立ち向っている。困難の提供者はあくまで自然の側にある。冬季登山という厳しい自然条件の選択も、ボニントンの思考の流れの上にあるものだ。これに対してメスナーの劇的思考はどういうものか。

#### メスナーの登山スタイル

メスナーの登り方は、ボニントンとは最初から異なるもののようにだ。無酸素、ソロ、速攻、何れも困難を人間の側から主体的に設定している。しかし右に挙げたどの条件も前に述べたように、実はすでに黄金時代に行なわれているこ

とだ。モーリス・エルゾークのアナプルナ登頂、ヘルマン・プールのナンガ・パルバット、ティツ・ヒーのチョー・オユーである。ただ彼らは、初登頂の敢行に際し、強行策としてやむなくそうしたのだった。使える適切な酸素ボンベもなかった。これに対しメスナーは、右に挙げた登り方を、登山のルールとして自らに課し、意図的にヒマラヤ登山の新しいスタイルを創造するために率先して実践した。彼にはヒマラヤ登山はシンブルでなければならぬという哲学があった。これは一つのイデオロギーだったので、彼のスタイルが広く定着するに至った重要な要因である。彼のもつ主体的哲学が彼を非凡にさせ、誰よりもヒマラヤ登山史を書き変えた男にさせたのだ、と思う。

ただ彼のスタイルが認知されるまでの道は、平坦ではなかった。世界の最高峰エヴェレストを無酸素で克めた時に彼が発した「今までの登頂はまやかした」という言葉は、伝統尊重の風風のある登山界では、前代未聞の劇的表現であった。登山界も人間の集まりだから、時折嫉妬が爆発する。功成り名を遂げた人に案外そのケースをみる。英国の山の作家、ウォルト・アンズワースがアルパイン・ジャーナルの初期から一九六七までの名品三十編を選び、古典的な題名『山・峠・氷』の下に一九

## 海外の山

### 「あと五百五メートル」

ポーランドのイエジ・ククチカ(三九)が九月十八日、チベットのシシャバンマ(八〇四六)に未踏の西稜から登頂、イタリアのラインホルト・メスナーに次いで世界で二人目の八千峰十四座登頂者となった。一九七九年秋のローツェ(八五一六)が最初だったからメスナー(十六年かかった)の半分の期間でジャイアントを総なめにしたことになる。ククチカの場合、十三座目のアナプルナはじめ四峰を冬期に登っていることも特筆される。ヒマラヤのいまを象徴するかのような成果だが、もちろん誰もが、あるいはどの国の登山家もが毎年二つの八千峰をやるわけではない。少なくともこの九月、十四年ぶりにウランバートルで再会したP・ゾリグ氏らモンゴルの登山家たちにとって、「八千峰」はそれ自体大きな目標であり、壁でもあるように見えた。

この欄でもすでに紹介したようにモンゴルの山男たちは一九九〇年を目標に「エヴェレストか、それに近い高さの高峰の登頂」を目指している。但し、国を代表する登山家であるゾリグ氏によると、まだネパール政府の許可は取っておらず当初計画の通りにゆくかどうかはわからぬそうだ。

#### 「あと五百五メートル」

師範大学でスポーツ史を教える五十六歳のゾリグ氏は、何度かそんな言い方をした。モンゴルの登山家の高峰登山記録はパミール(ソ連)のコミ

ミニズム峰で、その高さは八千峰まであと五百五メートルある、というのである。

エヴェレストは許可取得が難しいので、カンチエンジュンガ、ローツェを含めた三つの八千峰のどれかを希望しているとのことだが、問題の一つは装備。モンゴルには高峰登山に耐える軽量、強固なものがなく、既に日本、西ドイツ、オーストリアからテントなどを取り寄せているという。

ゾリグ氏ら五人のモンゴル人登山家とは一九七三年、東京外語大山岳会の招きで来日した際、共に雪の北ア・五龍岳に登ったのだが、十四年の時間を経て集まってくれた山男たちはきのうまでザイルを結びあっていた身近な仲間の感覚でさくばらんに日本の思い出を語り、初めてのヒマラヤ計画を説明してくれた。

日本の四倍の広大な国土に僅か二百万の人しかいないモンゴル人民共和国でヒマラヤに登山隊を送り出すことは並の日本人には想像もつかない困難があることだろう。しかし、どうしてもヒマラヤに行く、と彼らは決意している。そして、当面「あと五百五メートル」

の壁が立ちはだかっている。

八千峰の登頂がそれ自体あまり騒がれなくなったのはいつからだろう。メスナーやククチカのように十四座全てを登れば別の注目を集めることになるが、それとても三番手、四番手となるとだんだん当たり前のことのような気がしてくるに違いないから恐ろしい。そんな時代にゾリグ氏らの「八千峰への挑戦」を聞いてみると、初心の二字が思い出されるのである。

八千峰はこれからも単純にその高さ故に人々をひきつけてゆくだろうが、頂きへの思いはそれこそ百人百様である。

(江本嘉伸)

八一年に上梓した本の中に、「ウインパーとマンマリー」という一編がある。アルバイン・ジャーナル第五七号にブレイクニーなる人物が寄稿した文章の抄録だが、その中で、ナンガ・バルバットで亡くなったマンマリーにたいしてあの偉大なウインパーが、手記や書き込みで嫉妬としか受けとれない恐るべき中傷を書きこんでいるのがそのまま活字になっている。登山の世界で他人に対する批判は珍しくなかったが、そのおおむねは新しいものに対する既成勢力側からのものだったように思われる。しかし一般論として登山界は不思議な世界で、他人の業績は大いに賞讃するが、自分の気に食わないものについては極めて自己抑制的である。登山という行為に本質的に内在する修養性といえるものかも知れない。

メスナー発言は、不快と快哉を同時に呼んだ。世間と登山界のギャップの大きい国ほどコップの中の嵐は激しかった。無酸素でなければヒマラヤ登山ではない、と断ずるほどの一部の登山ジャーナリズムの便乗主義が思い出される。メスナー発言については、別の解釈をした方がよさそうだ。彼の唱える無酸素やスピード登山が胎む危険や困難は、ヒマラヤの高度とスケールを実感できる人にして初めて理解されることである。それが分かっているのは、誰よりも

エヴェレストの先鋒者たちである筈だ。いくらメスナーが独善的であっても、この人たを頭に置いてあの発言をしたとは思えない。彼は一般大衆に向けて語ったのだろう。五百年來ヨーロッパ文明は、海外冒険の成果を糧に育ってきた。そのため一般人の冒険への好奇と関心は長い文化伝統でさえある。冒険物語りが少年の夢にとどまる日本とは、環境が大分違っている。ハイエルダールのコンチキ号も、ティルマン、シプトンの『ナンダ・デヴィ』も一般向けの良書なのだ。山に関する主な本はすべて一般読者向けである。メスナー発言も、一般人の側からは、著者が自分の業績の真価を端的に分からせるために、他者の登山と比較して少しどぎつく表現したものととして、それほど抵抗もなく受け入れられたのではあるまいか。

そうはいってもメスナーの稀有な独善的性格は救い難いようだ。しかし、独善的でなければあの先驅的業績は生まれなかったろう。サミットで、君はエゴだけを語り、山の美を語らぬ、思いやりを欠いている。物事にはバランスのあることを忘れぬように、といった非難を一身に浴びている。しかし経験と自信と独断でそれらの攻撃を鋭くかわしている。誰もが彼に一目も二目も置いているのだ。人柄・お国柄がちがう七人のトッブ・クライマーが共通して持つあ

## 海外の山

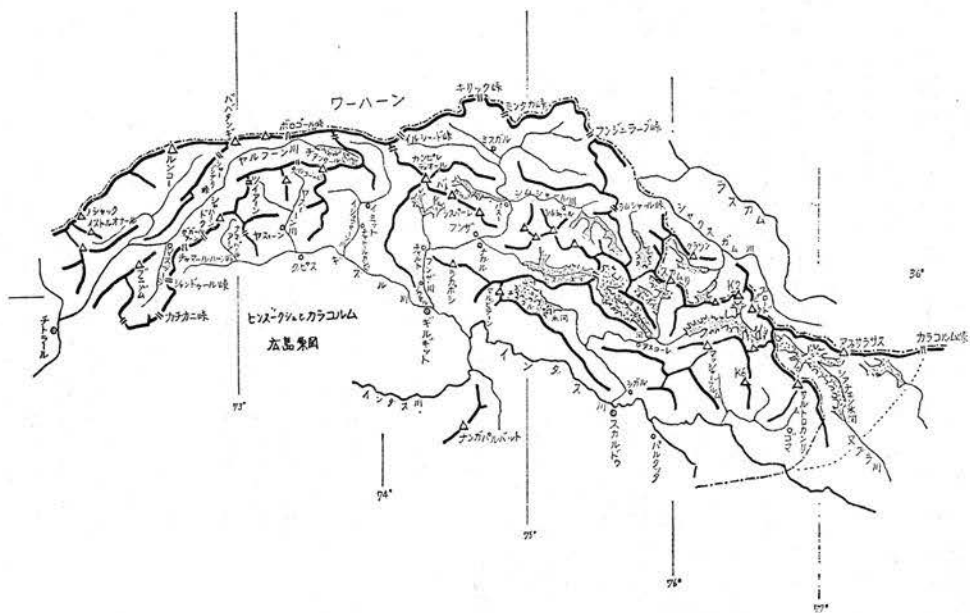
パキスタンの  
トレッキング規則

海外委員会

このパキスタンのトレッキング規則の抜粋は、本委員会、日本パキスタン協会、広島三朗氏が日本山岳協会の海外委員会総会の際に提出されたものです。同氏のご好意により、そのまま本委員会に発表させて頂きました。

一九八二年よりパキスタン北部登山地帯のトレッキング規則が確立され、五五のトレッキング・コースが発表された。その後、周辺国との関係悪化などで、一二コースが閉鎖され、八コースが観光省に許可申請をし、ガイドの同行が義務付けられている規制 (Restricted) コースになっている。しかし三四コースは全く何の規制もない、トレッキングが自由に歩けるオープン・コースであり、このなかにはヒマホー氷河からスノーレイク、ヒスパール氷河という、昔なら大探検隊のコースまで含まれている。パキスタンのトレッキングの現状を知ること、この付近の登山や偵察活動がスムーズに運ぶと考え、新着の資料を公開する。

(広島三朗)



山をきれいにゴミは持ち帰ろう

海外の山



るものの、メスナーが象徴的存在として地位を占めているのがよく分かる。彼は間違いなくカリスマなのだ。片やポニントンが社会にしっかり根を下ろす拔群に有能なテクノクラートなら、メスナーは自然に対する神秘的な直観力と、え、あらゆる「俗」の権威を否定する社会の外側の人、アウトサイダーであるといえる。

アウトサイダーであり、カリスマであるメスナーの影響は、ポニントンをはるかに凌ぐものがある。彼はなによりもヒマラヤ登山のスポーツ化の元祖である。無酸素、ソロ、速攻、何れも人間の作ったルールである。スポーツは何よりルールの設定を前提とする。メスナーはまさに登山にルールを持ち込み、これによって登山の

お知らせ

### 三国合同登山記念

#### テレフォンカード

チョモランマ遠景、近景と隊エンブレムを用いた三種。組み合わせにより、二枚組(二千元)と三枚組(三千元)を販売いたします。

申し込み組別明記の上、返信用封筒に宛先と送料¥310貼付  
送金・協和銀行本店・店番110  
251261・JACテレカ  
係山本篤「会員No.も明記する

三国登山隊事務局

ブーツ化を始めた。ルールが定着すると、次にはスピードと数値を争う競争面が顕在化する。ポニントンは冒険の裏側には競争心がある、と指摘したが、メスナーは身を以て競争を公然化した。かつて登山界の伝統は、こういう競争意識をタブー化してきたものだし、特にティールマンやシブトンなどは蛇蝎視したものだ。競争の公然化は、当然その競技化をもたらし、そうなるに競技と表裏の関係にある、観客を意識した登山の「演技演出化」への道を拓く。その扉を開いたのもメスナーであった。もちろんヒマラヤのパフォーマンス(演出化)には、登山自体の成熟という背景がある。技術レベルの向上と普及がなければ、巨峰の舞台劇場化などとは思えない。よらぬことだ。昨今のわが国のヒマラヤ遠征登山を見ると、こういった演出化されたパフォーマンス登山の例をいくつも数えることが出来る。それへの人の好みとは別に、近代スポーツでは、演者と観客の対極化は、とくに電子情報化社会を背景にしても引き返すことの出来ない道なかも知れない。ヒマラヤ登山のこのパフォーマンス化もまた、メスナーに端を発した流れの上にあると、解釈しているのだがどうであらうか。さて現代登山に多様さをもたらした二つの原点をみてきたが、その多彩で華やかなハイライトを浴

◎パキスタンのトレッキング規則の抜粋  
海外の山  
六〇〇〇米未満はトレッキングの範囲で考え、登山にはならない。

・チトラール、ギルギット、スカルドの三地区を北方地区とし、それ以外の地域でのトレッキングは完全に自由である。例えば、スワートでフアラクサル峰に登ってもトレッキングである。

・上記の北方地区においては、トレッキングは三つのカテゴリーに分類される。④オープン・ゾーン(コースと考えるべき)は全く自由である。⑤規制ゾーンは現在ハコースあり、国境に近いなどの理由で、政府公認のガイドの同行が義務づけられ、公認のトレッキング・エージェンシーを通じて観光省に申請する。⑥Pakistani Tours Ltd, Flahmans Hotel, The Mall, Rawalpindi. ⑦Travel Wajis Ltd, P.O. Box No. 1088, Wajis Bui-ling, 10, Khayabane-e-Shirwazy, Islamabad. ⑧Siara Travel Consultants Ltd, P.O. Box No. 63, 25-26, Shalimar Plaza, off the

Box No. 63, 25-26, Shalimar Plaza, off the

照)

Mall, Rawalpindi. ④Koh-e-Noor Treks, G-6/1, T & T Centre, Aabpara, Islamabad. ⑤Karakoram Tours, 1, Bahro House, Street 19, Sector F-7/2, Islamabad. ⑥Broad Peak International, Block-13, Flat-12/E, Jinnah Super Market, Markaz F-7/2, Islamabad.  
(以上のうち①のみ Govt. Owned ②③④⑤⑥は Licensed) ⑦現在閉鎖ゾーンは一二で主にシアチェン氷河付近の一〇コースとアフガン国境に近いツイ・アーンとシャージナリ峠のコースである。

・オープン・コースとオープン・コースに囲まれた地域はオープン・ゾーンと考えられる。例えば33のナズバール峠・ザガル峠・マスツジと34のバルサット、シャンドール峠、マスツジに挟まれたチャマルハーン峠など地図上で調べると多くのコースがある。

海外の山

びる登場人物の可成りの人々は、舞台効果を考慮する芸能人的な姿に変容しつつあるように見え、私には感じられる。世評に対して黙示的・禁欲的な態度を持っていた、登山の伝統を頭に浮べると、私は時代におくれたのかという自省と、また登山の世界の変調を無念に思う気分が襲われる。

しかしながら、サミットの終りの部分を読むと、他のスポーツに比べて登山の特殊性を絶対に認めず、騎人時代を超越しようとするスパー・エクセントリックであるメスナーでさえある程度、座談会に出席した他のすべての現代の前

衛たちとどうように、自己を広告やメディアに売りこむことに對して、登山の伝統そのままに恐ろしくビュリタンであるのに、目を見張った。要するにわれわれはスターになってはいけないのだ、とまでダク・スコットは言い切っている。またサミット参加者の一人ベガンが、次のような発言をしていることも付記したい。ヨーロッパの三大北壁を冬に単独登攀したイヴァン・ギラルディニの、「アイガー北壁を十時間で登ることに興味がない。むしろ五日間、壁ですごす方が山を感じられる」という言葉の紹介である。サミット

の主催者が、皆さん、山で味わった感覚をなぜお話しされないのか、との質問にたいし、「登山家はもともと恥しがり屋なのだ、そんなことは一人で静かに書くべきものだ」との返事が返っている。世は変わり、登山の諸相は派手になっても、登山する者の心の中には、黙示的・禁欲的精神というものがある。人の魂をつかんでストイックにさせる登山とは、今更ながら不思議なものだと思ふ。

(付記 拙文の仕上げには、近くに住む山の友人、元会員の池戸誠二郎君の助言があった)



## 第二十九回有志閑談会

(昭和六十二年六月  
二十七日、大隈会館内  
完之荘にて)

瀬澤さん、九十歳と思えないお元氣である。「山」六月号から連載のピッケルに関する話、これに関連して野中至明治二十八年冬富士登頂、また昭和十四年三月に広瀬さんが深田久弥氏と富士観測所の屋根の上から滑降した話など豊富な内容であった。(筆者註、この時の滑降高度差約三千メートルは国内の記録の筈。)

ここは市井と思えない閑静な場所である。庭園のあやめ、つつじは昨年比べて盛りを過ぎていた。定刻の午後二時には殆んどの人(定員三十名)が集まった。膳部が配られて、家主さんに等しい閑根吉郎さんの音頭で乾杯。思い思いの飲物に気分がほぐれる。幹事役の閑塚貞亨さんから、欠席された方々の消息を告げられ、談話会に入る。岡沢祐吉さんはスイスの宿で見た藤島敏男、伊藤秀五郎阿氏やブラヴァンドの記名のコピーを資料に、そのエピソードを話す。次に山村正光さんが現在甲州で進行中の四、五千年前の縄文土器発掘の状況を話す。そしてお二人共、この席でしか聞けない丸秘話を付け加えることを忘れたなかった。

次は本日わざわざ出席願った広瀬さん、九十歳と思えないお元氣である。「山」六月号から連載のピッケルに関する話、これに関連して野中至明治二十八年冬富士登頂、また昭和十四年三月に広瀬さんが深田久弥氏と富士観測所の屋根の上から滑降した話など豊富な内容であった。(筆者註、この時の滑降高度差約三千メートルは国内の記録の筈。)

あと幾つものグループが出来て久瀬の話に花が咲き、カメラを持つ人たちが忙し。遅くなって西堀元会長が駆けつけられ、会はずび盛り上った。話に夢中になっているうちに、誘い合せて二次会に出かける人々もあり、時計を見たなら閉会時間の四時になっていた。

出席者・順不同 山崎金次郎、鶴岡元之助、河野幾雄、広瀬潔、西堀栄三郎、閑根吉郎、鈴木正俊、板倉勝正、濱野吉生、名児耶達男、安彦六郎、松田雄一、早川瑠璃子、蜂谷緑、武田満子、斎藤から、岡沢祐吉、青木昇、滑志田隆、山村正光、片岡博、川崎精雄、(幹事) 閑塚貞亨、平井和雄、金山陽子。(川崎精雄)

## 白峰 北岳

小林 碧郎

帽灯に蛾をたせゆく梅ふかし  
梅の根に息しづめをり虎つぐみ  
登行の灯消すや夜明のお花畑

## おわび

会報第五〇〇号に早川義郎先輩を偲んで一文を書いたのだが、重大な誤りを後になって知った。会報の権威のために些末と雖も許さる可きでない。ここにお詫びをさせて頂く次第である。その誤りは早川さんが初めて慶応山岳会(當時は山岳部ではない)の登山に参加された年を大正六年としたことである。実は大正七年であった。

私が誤りをおかした原因は、登高行第一号の年報欄のミスプリントに気づかなかったことによるのである。

七十年以上も経ってしまった今、「山岳」八二年の追憶欄に改めて早川さんの追慕を書くために気がついたのである。単なる誤植であることは、前後の事情からすぐ判るのだが、余り単純すぎる誤りのためかえって誰もが気づかなかったのである。

ろう。不思議とさえる。

登高行第一号年報欄一五三頁に大正六年度夏季登山行程左の如し、とあり、その後一カ年分の登山記録が掲載されている。同一五五頁最終前行に大正七年度とし最終行には新人生歓迎講演会とあって同一五六頁に再び大正六年夏季登山計画とある。早川さんは同第二隊、常念山脈縦走第一班遠藤四郎先達(リーダー)とせず、先達と記してあるものもとに三田幸夫本会元会長も、共に参加されている。

これは明らかに大正七年とある可きものを表題の部分だけのミスプリントで、その他は凡て辻褄が合うのである。余り明白な誤りなので、今更ご健在な三田さんにうかがって見ることもせずこのお詫びの小文を書いた。

(一九八七・六・一 谷口現吉)

## 白馬登山

南 秋草子

昨年三月二十一日、茅ヶ岳山頂にて深田久弥氏の祥月命日の誕経を捧げ、夏には白馬岳へ登ってききました。

大雪溪登る歩幅を小さきみに  
しきりなる落石雪渓にまで及ぶ  
老鶯や大雪溪もほぼ半ば  
雪溪や白馬杓子屹立す  
岩雲霧に現れ霧に消え  
雲海の水際いろどるお花畑  
一畳に三人寝よと登山小屋  
山頂の小屋に目覚めて星月夜  
大雪溪下る時には尻餅も  
胸(ヒカガミ)の痛みをこらえ  
つつ下山

## 西藏行

伊佐九三四郎

白き峰氷河の襲を見おろしつ成

都より翔ぶ西藏の旅

三十一の文字にて詠ふこと難し  
あまりに広き西藏の原  
かぎりなき草の原あり羊逐ふ牧  
童の姿群れに融けあひて  
岩山の頂きにそびゆるボタラ宮  
ラサの鎮めの城のごとくに  
請慢行岩に書きたる悪路往く心  
急げど車進まず  
ラサの雨峠は雪に変わりたり凍て  
つけるタルチョはためきもせず  
ふり仰ぐ氷河の峰は間近にて車  
よぎりぬ羊群の列  
四千メートル壁に書きたる高原  
にヤク逐ふ人の軽き足どり  
菜の花のあまりに淡き色なれば  
『おぼろ月夜』はつひに歌はず

物乞ひつづ巡礼の旅二歳余カイ  
ラスより帰るチベットの民  
一二三数詞同じき民なれど何故  
に切れたるこの葉の糸  
差したる青稞酒の盃ひととき  
に干したる味はシードルに似て  
ことの葉の切れたる間の民なれ  
ど心通はす青稞の酒  
チベットを外と呼びし通訳の  
劉嬢の故郷は大連といふ  
慧海の名通訳の口にのぼりたり  
セラ寺にしのぶ名僧の旅



## 図書紹介

### 報告書四冊

『氷壁のワンダーランド 福岡大  
学山岳会ナンガバルバート遠征  
隊登頂記』  
一九八五年のディアミール壁か  
らの登頂記で、一九七六年の撤退

## 今年もさげんで会いましょう

### 会員通信

(雁部貞夫氏より編集宛)  
十年ぶりにチトラルへやって来  
ました。電灯がともり、町中をジ  
ープやバスが走りまわり、昔のよ  
うなキヤラバンや馬の旅はムリに  
なりました。  
ティリチ水河に十日間程滞在、  
久しぶりに大きな山々の雄姿にタ  
ンノウしました。  
(チトラルにて  
一九八七・八・二十一)

をエネルギーに、報復一再挑戦と  
なった。記述は自信に満ち、自ら  
をほめているようなところは隊長  
が隊員をばますためののだらう  
か。

一九八六年四月第二版刊、B5  
版、九一ページ、定価三〇〇〇円  
『高みを求めて HAJ K2  
登山報告書』  
日本ヒマラヤ協会の一九八五年  
のK2登山は、協会内に八千経  
験者を育成するという目的であつ  
たから、南東稜からできるだけ多  
くの者が頂上に立つことに目標が  
おかれた。隊員は経験豊かな山田  
昇氏や、ヒマラヤ協会のそれぞれ  
の登山隊で七千峰を経験した者  
たちなど十六名で構成されてい

る。あらかじめルートの状況や、  
行動基準などお互いの確認事項が  
列記されているのが目を引く。  
天候に災いされて二次以降のア  
タックは失敗し一次隊の三名のみ  
が頂上に立った。

一九八七年二月刊、ワープロ印  
刷、B5版、一四六ページ、定  
価一五〇〇円  
『K7初登頂 東大スキー山岳部  
カラコルム学術登山隊一九八  
四』  
難峰K7に東大の学生を含む若  
々しい隊が全員登頂をなしとげた  
ことは印象的であったが、一九八  
〇年にもシプリンの北稜を初登攀  
しその実力を示していた。

しかしこの報告書はA5版で版  
も小さく、タテ二段組、記述も平  
板で、山登りの活力と対応してい  
ないのが残念である。迫力がある  
であろうカラー写真も小さく分け  
られ、色もくすんでいる。報告に  
もそれなりの活力を示して欲しか  
った。

一九八七年三月刊、A5版、一  
六四ページ、定価一八〇〇円  
『CHIRING チリン峰・七〇九  
〇m 登攀と遭難の報告』  
一九七九年のスカムリ峰に続き  
チリン峰を目指した横浜山岳会隊  
は、上部キャンプを延ばしている  
段階で、休養のため全員BCへ下  
ることになり、一名がチリン水河  
を下山中ヒドゥンクレバスに落ち  
死亡した。天気は悪化に向ってお

り、その当日は気温が高く、雪の  
状態が悪かったという。  
遭難の直接の原因は単純なもので  
あり、反省点もいくつか考えら  
れる。それらとは別に「事故がな  
かったら、初登頂に成功していた  
ら、あまり表に出ないでなんとか  
なっていました」隊全体の背景を  
なす問題点もまとめられている。

一九八七年五月刊、A4版、一  
二四ページ、横浜山岳会  
(児玉 茂)

### 屋久杉が消えた谷

津田 邦宏著

本書は、屋久島の山々に囲まれ  
た原生林の谷が、大正末期に国の  
伐採基地として開拓され、木を切  
り尽くして森としての機能を失  
い、廃村となるまでの半世紀にわ  
たる歴史を記録したものである。  
本書の腰巻で「屋久島の自然に  
日本の森の未来をみる」とあるよ  
うに、発刊の目的は「自然保護の  
啓蒙書」とみられるが、その面よ  
り、大正十二年の基地開設から昭  
和四十五年の基地廃棄までの四十  
七年間を、戦前、戦争中、戦後の  
混乱期、高度成長期に分けて、記  
録された各章が、読者に強い印象  
を与えよう。

とくに大正末から昭和十年前後  
までの山林経営、谷に生きた人達  
の生活や心情の記録を、外部から  
の目でなく、谷に住んだ人達の口

述を含めて、当時の様子を述べた  
第二章の記録は貴重だ。(明治末  
から大正初期の内地の山村の生活  
も同じようなものだったと想像さ  
れ、その意味では田部重治の秩父  
や、大島亮吉の十文字峠で、かい  
間見せてくれる当時の山村風景の  
リアリズム版をみるような気持ちで  
読んだ)

著者は朝日新聞西部本社社会部  
記者。一九四六年生まれ。  
一九八六年十二月刊 朝日新聞  
社 四六版、定価一三〇〇円。  
一九七ページ (関塚貞亨)

### 山頂へのみち

筑木 力著

「わが未踏峰探訪の旅」  
副題に未踏峰の言葉があつてや  
や奇異に感ずるかも知れないが、  
筆者は「あとがき」に次のように  
記している。  
「『未踏峰への初登頂というよ  
うな企ては、もはやできにくくな  
ってきた。従って他人がすでに登  
頂した山であつても、その登り方  
を工夫し、変化をもたせることに  
よつて、中身を充実させ質の向上  
を図ろうとする考え方が広まって  
きた。』即ちあくまでもわが未踏  
峰とその登山の内容の変化、充実  
と考えてよいようだ。

一読してまず、さすがは高校の  
先生だけに「高校山岳部の登山の  
在り方」の聖典ともいふべきもの  
だと感じた。整然たる登山活動へ



の論理構成と豊かな自然を愛する感性を兼ね備えた人にして始めてできる業績である。こういう先生を山岳部の顧問にもった高校生は幸せだと思ふ。

本書の構成は随想・談話・研究、紀行、報告と記録、の三章にわかれていたが、もちろん第二章の紀行に力点がおかれている。年代も山行形態もまちまちだが、「人間も自然界全体の調和の中で、その一員として生きていく」との精神が脈々と貫かれているように思う。

筆者は静岡県出身だが、本当の新潟県人以上に新潟県を愛しておられるのが行間ににじみでいるようだ。序文は日本山岳会越後支部長佐藤一栄氏。

一九八七年四月刊 A5版、三〇ページ ほおずき書籍(株) 定価一八〇〇円 (小倉 厚)

### 尾瀬は病んでいる

加藤 久晴著

一昨春秋、関越自動車道が開通して以来、尾瀬への入山者は年間九十万人にも達したとか。その多くが、ミズバショウやニッコウキスゲの季節に集中することはいうまでもない。かつて山上の楽園とたたわれたアヤマ平が踏み荒さられて裸地となり、その修復が続けられているが殆ど絶望的だとい

いまや尾瀬全体が病んでいる。シ尿や生活排水が流れこむため、湿原は富栄養化して植物を変え、尾瀬沼には、外来種のコカナダモが異常繁殖しているという。尾瀬の現状を告発し、自然保護への方途をさぐるこの本の著者は、これまでも放送番組を通じて尾瀬の危機を訴えてきたTVマンである。

一九八七年六月刊 大月書店 二二二ページ、定価一五〇〇円 (蜂谷 緑)

### 画文集 山麓紀行

橋本 廣著

今年の五月初旬、野良仕事に汗を流していたら老人が近づいて来た。見れば橋本君だ。小わきに数冊の本をかかえている。石坂君、「山麓紀行」を読んでも呉れ、指導もしてくれと云って去っていった。土の付いた指で開いてみると、車と脚と筆と絵具と紙で直字した結華が注がれていた。山行を共にしていた時も寸暇を求めているスケッチをわすれなかった。ところと時節による山の肌は変異するが、自然の懐に入ると感情は常に集中力の鬼と化し、絵面を力づけ、要を活かしてくれている。

北陸高速道の開通によって右に左に見える山景も、時代のスピードに順応しないまでも、時々サードブレーキで止まって眺めるのが時代に振り返る余裕であり心のやすら

ぎを求める方法になりはしないか。

ある日、早月川の川辺で仮眠している長距離トラックのドライバーに出会った。曰く、立山連峯の朝映けが今の世の華にみえた。と、橋本君も気圧配置をみながらカンパスと共に飛び出し山をえがいたことだろうと考える。

この山麓紀行に収録されている「剎岳十景」は越中人にとっても、山を志す者であれば充分味い得る剎の魅力を一六〇度に近い方面からえがいている。その努力に敬意を表したい。写真で見られない温かい山の肌に接し得る話らしい心であらうと思う。

山の姿を世代に送る、語りつがせる玉であらう。

一九八七年刊、能登印刷出版部 定価三〇〇〇円 (石坂久忠)

### 火山の一生

地球の歴史をさぐる② 松本 恒夫著

日本には火山が多い。同時に三原山などの災害も予想される。登山者は火山についての判り易い説明や、最近の学説の紹介、噴火予知の現状など望んでいるのではなからうか。

本会会員でもある著者は、このような読者のことも考えて、本書

を書き進めたようだ。永年にわたって調べて来た九重火山と阿蘇火山について、壮大な景色に対する驚きから説き始めて、特色のある地形や地質、これまでの噴火の歴史や火砕流、地熱発電の話に進み、両者の岩石の違いから、前者は山陰系、後者は琉球系火山に属することを証して、マグマの話に達するという興味深い展開が見られる。

このあと日本の象徴である富士山の一生を詳しく述べ、昭和南山、ネバドデルルイス火山、三原山など新しい噴火活動にも言及している。

内容上、多少堅苦しい表現も見られるが、塩基性岩と酸性岩、ストロンボリ式とプレリー式、あるいは円頂丘と成層火山の違いを知れば、美しい火山に接して、なお一層多くのことを学び、新たな感動が得られるのではなからうか。

最近著者は「山・探検・フィールドワーク」(玉川選書71)、「阿蘇火山」(東海科学選書)等も出版している。

一九八七年六月刊 青木書店 一九〇ページ 定価一七〇〇円 (中村純二)

### 守れ権現

太田 敬著

本会の金庫番、監事の太田敬君

が初めて本を出した。中学一年生の最初の山行大峰山から、昨年十二月の稻倉山まで、六十年間に登りまくった山の物語である。

大峰山へ登る前、周囲の人から、散々恐ろしい話をきかされ、登山口のお宮では必死になって山の無事を祈った。その神様が権現様であった。大学へ進んで山岳部へ入ると、偶然にも部歌が「守れ権現」で始まっていたので、それが題名になったと云う。

全文四章に分かれ「学生時代」はヒマラヤを目差しての猛訓練の様子が画かれ、「戦争直後」では登山空白時代の貴重な報告となっている。第三章「ポリオ罹病の後」は後遺症の歩行困難と闘いつつ登った山の記録であるが、大部分は単独行である。他人に迷惑をかけまいとする心情が読む者の心を暗然とさせる。

第四章の「追憶」は、共に登りし友を主とする十二名の追悼であるが、その一つ、「交野さん」との最後の山は、昭和六十年十月に望月達夫会員等と南アの山中に独居二十余年の交野武一会員を訪ねて家の近くの二兎山に行った時の紀行である。詳しい筈の案内役がいて一行は道に迷い、一夜の野宿を強いられれたのも異なことだが、四カ月後にはその交野さんがその一軒家で不慮の火災でなくなられたという秘話である。

全巻二八五頁。 珍しい昔の写

真多数の他に、楨さんの自筆「山を尊び山を愛し山と共に生く」の色紙、辰沼広吉会員の多数のカット、本人の「夜叉神峠」の水彩画等が異彩を放っている。残念なことは非売品、ルームの図書室でどうぞ。  
(河野幾雄)  
一九八七年七月刊 金星堂

## 火山地形について

### 科学研究委員会

本会、科学研究委員会の主催で「火山地形について……噴火の予知、登山の安全性との関連等」の講演会(六十二年六月二十六日)と吾妻山群での探索山行(六十二年七月十八・十九日)が行なわれた。

講師は、気象庁地震火山部の沢田可洋氏である。

ルームでの講演会と探索山行での解説の概要は次のようである。

\*

講演会では主として、日本での火山噴火の状況と各種の火山災害の実態が解説され、吾妻山では火山現象とその観測方法、さらに昨年の伊豆大島噴火の際に得られた多項目にわたる研究成果を例として噴火予知の現状について説明された。

火山噴火は繰り返し発生するものであると講師は強調された。

しかも前兆現象の検出後、極め

## トレッキング55コース

### トレッキング 55 コース

- (ス) スカルド起点 (O) オープンゾーン・コース  
(ギ) ギルギット起点 (R) 制限ゾーン・コース  
(チ) チトラル起点 (X) 閉鎖ゾーン

- (ス) ゴマからギョン氷河を経てガルクン(6620m)山麓往復 (X)
- (ス) ゴマからチュミク氷河を経てチュミク峰(6754m)山麓往復 (X)
- (ス) ゴマからビラフォン・ラ(5547m)を越えロフォン氷河・シア・ラ(5833m)・アブルツツイ氷河・K2 B C・バルトロ氷河を経てアスコレからスカルドへ戻る 逆コースも可 (X)
- (ス) ゴマからビラフォン氷河を経てK12(7468m)山麓往復 (X)
- (ス) ゴマからK13(ダンサム峰 6660m)山麓往復 (X)
- ダンサムからコンダス川を廻りシュルビ・ガン氷河を経てサルトロ・カンリ I 峰(7706m), II 峰(7742m), シュルビ・カンリ(7380m)の各山麓往復 (X)
- (ス) ダンサムからコンダス川を廻りコンダス氷河を経てコンダス峰(6758m)山麓往復 (X)
- (ス) ダンサムからコンダス川を廻りカペリ氷河・チョゴリサ(7654m)麓・ヴィーヌ氷河・チョゴリサ氷河・アブルツツイ氷河・バルトロ氷河を経てアスコレからスカルドへ戻る 逆コースも可 (X)
- (ス) カバルからフーシェ谷を廻りチャラクサ氷河からK7(6935m)山麓往復 (O)
- (ス) カバルからフーシェ谷を廻りトリニティ氷河・トリニティ峰(6800m)麓・ヴィーヌ氷河・バルトロ氷河を経てアスコレからスカルドへ戻る 逆コースも可 (R)
- (ス) カバルからフーシェ谷を廻りゴンドゴロ氷河・ビアルチェンディ峰(6705m)麓・バルトロ氷河を経てアスコレからスカルドへ戻る 逆コースも可 (R)
- (ス) カバルからフーシェ谷を廻りマッシャブルム氷河からマッシャブルム(7821m)麓往復の後マッシャブルム峰(5883m)を越えバルトロ氷河を経てアスコレからスカルドへ戻る 逆コースも可 (R)
- (ス) カバルからフーシェ谷を廻りアリン氷河を巡る (O)
- (ス) シガルからターレ峠(4877m)またはツセルボ峠(5084m)を越えターレ川を下りカバルへ 逆コースも可 (O)
- (ス) ダッソーからアスコレを経てスコロ峠(5073m)あるいはマンゴグサル峰(6288m)麓往復 帰路はスコロ峠またはダッソー経由 (O)
- (ス) アスコレからパンマ氷河を廻りチリン氷河・ドレンマング氷河を巡った後スカム・ラ(5833m), シム・ラ(5833m)を越えてチョクトイ山群を一周 (R)
- (ス)(ギ) アスコレからピアフォ氷河を遡ってヒスパール峠(5151m)を越えヒスパール氷河からフンザ/ギルギットへ 逆コースも可 (O)
- (ス) アスコレからピアフォ氷河・シムガン氷河を遡ってスノーレック往復 (O)
- (ス) チャボからソズブン氷河・ガンチェン(6462m)山麓往復 (O)
- (ス) パシャ川を遡ってアランドウからチョゴルンマ氷河を巡る (O)
- (ギ) サシからイスカバル氷河を経てハラモシュ(7406m)南麓往復 (O)
- (ギ) サシからマニ氷河・パスカイ氷河・ゴバラシュ氷河を巡る (O)
- (ギ) ビルチャからドバニ峰(6143m)・ディラン(7279m)・ラカボシ(7788m)の各山麓往復 (O)
- (ギ) チャルトからラカボシ北麓往復 (O)
- (ギ) ミナピンからミナピン氷河を遡ってディラン北麓往復 (O)
- (ギ) カリマバード(フンザ)からナガールを経てホーパール氷河往復 (O)
- (ギ) カリマバードからナガールを経てディラン・ミアール峰(6824m)・マルビティン(7292m)の各山麓往復 (O)
- (ギ) ルパール谷・ディアミール氷河・ラキオト氷河・ブルダール氷河を巡る ナンガバルパット(8126m)一周 (O)
- (ギ) カリマバードからヒスパール氷河を遡ってクンヤン氷河, プマリ・キッシ氷河, ジュトマル氷河, カニバサ氷河を巡る (O)
- (ギ) バスーからシムシャール川を遡ってルブガル・ヤズ氷河・モミル氷河・マラングッティ氷河・ヤズギル氷河・クロドピン氷河を巡る (O)
- (ギ) ノマルからナルタル谷を廻りダイントル峠(4800m)を経てチャルトからギルギットへ戻る チャリ・カンド峰(5898m)一周 (O)
- (ギ) ノマルからナルタル谷を廻りカルタル峰(5885m)麓を経てイシュコマン川/グアクーチからギルギットへ戻る (O)
- (ギ)(チ) ヤシンからナズパール峠(4977m)・ザカル峠(3720m)を経てマツツジ/チトラルへ 逆コースも可 (O)
- (ギ)(チ) バルサットからシャンドール峠(3720m)を経てマツツジ/チトラルへ 逆コースも可 (O)
- (チ) マロイからバルム谷を遡ってティリッチミール(7708m)南東面麓往復 (R)
- (チ) アルカリ川からルコー川を廻りガラムチャシマ(88)を経てブリシュト往復 (R)
- (チ) ウタック峠(4647m)を経てカフィリスタン/ランブール谷・バンボレット谷・ピリー谷を巡る (R)

(9ページへ続く)

-----トレッキング55コース-----



て短時間のうちに噴火に至るケースもあり、的確な噴火予知の実現は少々困難であるという状況が紹介された。

一切経山には、気象庁が定期的に観測する噴気地帯がある。ここで沢田講師と舟崎氏によって観測のデモンストレーションが行なわれた。

参加者一同は火山にはおなじみのつもりでも、観測は珍しい体験で熱心に見学した。

火山活動は沈黙しているように見受けられたが、それでも地表から静かに出ている噴気の温度は八五度であり、硫化水素が〇・五％、炭酸ガスで〇・七％検出された。勿論人体に危険な濃度である。

吾妻小富士にも登り、講義を受けた。

講演会の参加者は二十八名。福島支部の中野正彦氏がわざわざ遠路来られたが、氏は昭和二十五年度の一切経山噴火の際に地球化学的研究を行なって発表しておられる。

吾妻山の探索山行は第一日目に新野地温泉に集合して、鬼面山に登り、火山地形の勉強をした。福島支部から多数の会員が参加して頂いてご案内下さり、交歓した。

二日目は福島支部長はじめ、支部の会員が大勢現地参加され、現地研修のあと、一切経山へ鎌沼・姥ヶ原に案内して頂き楽しい山行

になった。

参加者・順不同

講演会—鈴木嶋夫、中野正彦、宅間清子、斉藤かつら、大木淑子、松久秀夫、中村純二、水村通子、高橋詢、梅野淑子、平戸孝夫、山口一孝、河野幾雄、高遠宏、遠田栄、田久保勇治、浜口欣一、関清、竹中敏郎、岡野修、石井恵美子、小山内正夫、須藤節子、滝沢芳章、大森久雄、的場大祐、石田要久、林桂子、沢田可洋、舟崎淳

探索山行—中島正夫、中野正彦、白石田春治、河上鎌治、笹川慶子、阿部明義、鈴木松三、佐藤光、遠藤明男、鈴木嘉、本多彦一、大谷司、佐藤有、鈴木松三、加藤栄、林桂子、石田要久、関清、久保孝一郎、須藤節子、入谷浩右、根本大、鶴田佐知子、丸茂さく江、里見清子、水村通子、奥野道治、遠田栄、鈴木嶋夫、松久秀夫、高橋詢、中村純二、斉藤かつら、高遠宏、石井恵美子、浜口欣一、沢田可洋、舟崎淳

第七回  
日本登山医学  
シンポジウム  
医療委員会

去る六月十三、十四日の両日、京都ロイヤルホテルにて、会長斉藤淳生先生のもとに、第七回日本登山医学シンポジウムが開催され

た。参加者は一五〇名であった。

今年の内容は、低圧環境生理関係五題、高地住民に関する調査三題、登山中の傷害と対策三題、高所肺水腫四題、綜説四題等、一般演題二六が発表され活発に討論された。二日目の午後の二時間は、特別企画(一般公開)、パネルディスカッション「死線を越えて—体験的サバイバル論」が大森薫雄、松永敏郎両氏の司会、大宮求、松田宏也、高塚賢次、中島直美の各氏の参加を得て、種々の体験論を中心に学術検討され、大変有意義であった。

本シンポジウムは、テーマ毎に大変興味のある内容であり、登山医学のかかえる諸問題の一つ一つが明らかにされるよう、一層の発展を期待したい。なお、従来から医者以外の人にもよりわかりやすく説明して欲しいという強い要望があったが、今回のシンポジウムではかなり「面白かった」「よくわかった」という声が聞かれた。一つの進歩と評価出来よう。

次回は、群馬県にて、会長田中杜佑先生のもとで来年五月下旬に開催される予定である。

過去六回の当シンポジウムの記録「登山医学」は山岳事務局でも取り扱っているもので、内容に興味のある方はご連絡下さい。一冊参千円也です。

(浜口欣一)

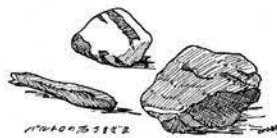
# トレッキング55コース

(8ページより続く)

38. スワート/カラムからウシ川を廻りカチカニ峠(4766m)を経てマツジ/チトラルあるいはシャンドール峠を経てヤシン/ギルギットへ (O)
39. (ギ) ノマルからナルタル湖・ナルタル峠を経てコリボールからギルギットへ戻る (O)
40. (ギ) ノマルからナルタル湖を経てパール さらにバルタル氷河往復 (O)
41. (ス) ダンサムからコンダス川を廻り K6 (7282m) BC 往復 (X)
42. スワート/カラムからウシ川を廻りカチカニ峠・シャンドール峠を経てギルギット さらにフンザ往復 (O)
43. (ス) カパルからフーシェ谷を廻りゴンドコロ谷往復 (O)
44. (ス) バラガールからターレ川を廻りターレ峠を経てスカルドへ戻る (O)
45. (ス) アスコレからスコロ峠を経てスカルドへ戻る (O)
46. (ギ) ラキオト橋からメルヘン・ヴィーゼを経てナンガバルパットBC往復 (O)
47. (ギ) ランブルからルパル谷を廻りナンガバルパット南東麓を巡る (O)
48. (ギ) オシュカダスからシナカンを経てパシヤンからブルチェ氷河・バグロ氷河往復 (O)

トレッキング55コース

49. (ス) サトバラ湖往復とフーシェ谷からマツシャブルムBC, フロズン・レイク往復 (O)
50. (ス) サトバラ湖往復とアスコレからアスコロ峠を経てアスコロ村往復 (O)
51. (ス) サトバラ湖往復とシガールからターレ峠を経てカプルーへ (O)
52. (ス) サトバラ湖往復とダンサムからコンダス川を廻ってシェルビガン氷河往復 (X)
53. (ス) アスコレからバルトロ氷河を廻ってコンコルディア・チョゴリサ麓往復 (R)
54. (チ) マツジ川からトリコー川を廻ってシャー・ジナリ峠(4259m)を越えヤルクン川を下ってチトラルへ戻る (X)
55. (ギ)(チ) ヤシンからツイ・アン(4499m)シャーニジナリ峠を越えトリコー川を下ってチトラルへ (X)



# ・会務報告

## 評議員会

日時 七月二十五日(土) 午後4時30分～5時30分

場所 三国友好登山事務局

出席者 今西会長、大塚副会長、松田、山野井、平林、宗實、中世古、田中、安間、越智、広羽、山田、大島各評議員、石橋総務委員長。  
以上十四名

## 議事

会長より評議員会招集の趣旨説明があった後、松田評議員を議長に選出、議事に入る。

大塚副会長より、「現在の会は、長期的に見れば、二十一世紀に向けてのビジョン作りが必要であり、短期的に見れば、定款細則の変更、国際化への対応など多くの問題をかかえている。しかしながら三国友好登山の実施などをかかえている現執行部では、対応しきれないので、定款第十九条に基き、これらの諸問題を評議員会に諮問したい」との説明があり、出席各評議員より意見をうかがった。しかしながらこの種の問題は、慎重にすすめる必要があるもので、引きつづき在京評議員会で継続して検討をつけ、十一月中旬までにとりまとめた上、十一月中旬開催予定の定例評議員会の議を経て、会長に答申することを決め、本日の議事を終了した。(松田)



(8月)

## 3日 総務委員会

11日 自然保護事務局  
17日～22日 夏休み

8月 来室者 87名

## 三国友好合同登山会募金応募者ご芳名

(八月十七日現在、一口〇五千元)

会員異動 8月  
退会

市野 弘 (五三七五)  
小林純一 (六五一八)

(三〇〇) 今西寿雄。(二〇〇) 小倉茂雄・董子、滝川悠紀夫。(一四〇) 大塚博美。(一二〇) 野口秋人(前回一口とあるのは誤り)。(一〇〇) 福原健司、橋本清、加藤達三郎。(六〇) 島田興、竹節作太、望月達夫、織内信彦、太田敬、高山忠四朗、松田雄一、鳴原啓佑・洋子、平林克敏、久野英一郎・英子、吉田満・三智子、吉田宏、上杉雄二、平石鉦吉、小寺佳美。(五〇) 安彦六郎。(四〇) 柴田均二、阿部和行、加納巖、横山誠之。(三〇) 大島輝夫、関塚貞亨。(二〇) 近藤恒雄、堀田弥一、杉本義信、平山武志、島居亮、大橋克也、高橋一雄、藤井保、清水悟郎、石間信夫、早川瑠璃子、進藤昭、大橋晋、木村勝久、村井喜一、織田沢美知子、三輪利雄、岡部みち子、平野征人、渡辺徳、中河与一、高遠宏、島津慶子、宮下秀樹、安間莊、小林孝次、鈴木昭、河野長、魚本定良、武田満子、下見徹、桜井仁、大洞陽一、安藤千年、岡田幸千生、相原軍一、岡沢祐吉、戸山芳一、山県浩、室伏偉男、長嶋正浩、富田郁夫、里見清子、勝山康雄、斎藤チヨ、石沢六郎、鈴木松三、山本武志、美原正人、宮本忠直、後藤邦慶、小田孝、橋野達雄、須藤節子、山下正代。(二〇) 斎藤啓助、亀谷外毅雄、大井正一、エーデルワイス、大津省吾、荻野昌宏、南崎大海、田満字正和、山浦源太郎、田中外治、荒木正弘、赤井一隆、柴田昌亮、林茂、宮下啓三、板井辰美、本田卯太郎、安藤文子、黒石恒、早川禎治、鶴見敏彦、田上敏行、菅原篤則、種村重明、柴崎徹、菅野時子、高橋俊紀、横山忠信、酒井定勝、柳沼シゲ子、西尾寿一、金成忠、細川俊彦、山崎健、田口善信、南安男、吉村健次郎、本間一人、新田隆三、大木淑子、山部一美、宇津力雄、川井照子、大野秀樹、玉岡憲明、東真澄、佐山邦彦、門脇愛子、百田治人、佐藤泰彦、三栖寿生、青木保良、三宅健治郎、川端浩文、高辻謙輔、佐藤春郎、河上洋子、宮入保徳、近藤友好、遠田栄、遠田篤子、霜田嘉一、長沢愛喜、近藤久子、小田薫、大塚玲子、鶴田佐知子、船橋山百合会、日高萬喜男、志岐義弘、志岐典子、遠藤克昭、佐藤義一、木村義照、小田島房志、橋目茂、竹内康之、桑原重男。(〇・四〇) 阿南寿範。  
【以上累計八六三・六二〇、三六三名、金額四、三一八、一〇〇円】



☎ 234-6659

この電話で  
お知らせ  
しています

### ●熊本支部設立三十周年

#### 記念集会開催のご案内

この度、熊本支部は設立三十周年を迎えることになりました。これもひとえに皆様のご支援の賜と厚く御礼申し上げます。つきましては左記の通り記念集会を催すことになりましたので、多数ご来席賜りますようご案内申し上げます。

日時 十一月十四日(土)  
十五日(日)

場所 熊本県阿蘇郡高森町  
南阿蘇国民休暇村

集会 十四日午後四時、記念晩餐会  
十五日、根子岳へ記念山行

会費 九〇〇〇円

申込 熊本支部または本会事務局へお申し込み下さい。

※各支部へは追って詳しい案内書をお送り致します。

熊本支部

### ●山岳図書交換会開催

読書の秋となり、恒例の山岳図書交換会を本年も左記の通り開催いたしますのでご参加下さい。特に若い方のご参加をお待ち申し上げております。

記

期日 十月二十四日(土)

場所 本会ルーム

開場 午後二時

### ●スライドによる講演会

題名 「ソ連の岩登りと山岳事情」

日時 十月二十七日(火)

午後六時半

場所 本会集会室

講師 オレグ・シユミロフ氏

ソ連スポーツ・マスター、審判員。

サマルカンドとドシャンベの間に位置するフランスキー・ゴリエの二千メートルの逆層の岩盤を十日間かけて初登した記録(その後、約二十組が挑戦したが未だ第二登は果されていません)をスライドを中心に話して戴き、続いて、ソ連の山岳事情をお伺いします。

海外委員会 共催  
指導委員会

指 導 委 員 会

共 催

共 催

共 催

共 催

共 催

共 催

共 催

共 催

共 催

共 催

### ●会員懇談会

「山の新装備を探る」(研究会)

講師 大賀由晋氏

日時 十一月十六日(月)

午後七時より

場所 本会ルーム

総務・青懇・婦人懇  
各委員会共催

共 催

共 催

共 催

共 催

共 催

共 催

共 催

共 催

共 催

共 催

共 催

共 催

共 催

共 催

共 催

共 催

共 催

共 催

共 催

共 催

共 催

共 催

共 催

共 催

共 催

共 催

共 催

共 催

### ●科学研究委員会談話会

科学研究委員会では毎月、委員会の前半に談話会を行なうことになりました。

テーマと話題提供者をきめて、なるべく面白く進行するように努めます。多数の会員の参加をお待ちします。

開催日、テーマと話題提供者は次のとおりです。

毎回六時三十分から一時間行ないます。

○六十二年十一月二十日(金)

環境の科学 高遠 宏

○六十二年十二月十一日(金)

燃焼の科学とコンロ 小西奎二

○六十三年一月二十一日(木)

スキー(板)の新しい傾向 松丸秀夫

○六十三年二月十八日(木)

東南アジアの菓草 山口一孝

○六十三年三月二十五日(金)

登山の行動科学 千葉重美

謹告

六十二年十一月七日予定して

おりました「危険な動物と安全

登山シンポジウム」は六十三

年四月に延期します。

科学研究委員会

科学研究委員会

科学研究委員会

科学研究委員会

科学研究委員会

科学研究委員会

科学研究委員会

科学研究委員会

科学研究委員会

科学研究委員会

科学研究委員会

科学研究委員会

### ●福岡支部より

十一月七、八日 多良岳登山を計画しております。参加希望の方は事務局深田(092-781-1716)までご連絡下さい。

お知らせ

### 山岳図書を語る夕べ

講師に望月達夫名誉会員を迎え、同氏が本会に寄贈された図書を中心にお話していただきます。

なお「この一本展」も併催します。

日時 十一月二十六日(木)

午後六時半より

場所 本会ルーム

図書委員会

編集後記 今回の号から校正は児玉茂君が担当します。

(岡沢)

昭和六十二年十月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五十一

サンビュウハイツ四番町

法人 日本山岳会

発行者 今 西 寿 雄

編集代表 岡 沢 祐 吉

電話東京(261) 四四三三

振替口座 東京三三二九番

東京都港区赤坂一三六

赤坂グレースビル

印刷所 株式会社 技 報 堂